＜保育方針＞

保育方針は毎年基本的には変わりません。しかし、実際にこの方針を具体化していく日々の保育のあり方は常に実践に照らし合わせ、子どもたちの目の輝き方を行動などから考え検討していかなければなりません。忙しい毎日の中でスローガンは掲げても、、、にならないように常に新鮮な気持ちで保育を見つめていきたいと思います。子どもたちが喜んで登園したくなるような保育園、親さんは子育てが楽しくなるような保育園、そして、そこで働く職員は「保育の仕事は私の生きがい」と思えるような保育内容作りを目指していこうと思います。

１　ひとりひとりの子どもを大切にし、より人間らしい発達に即した保育の創造を目指します

人間の発達は、遺伝だけで決まるのではなく、環境だけで決まるものでもありません。子どもたちがそれぞれの時期にふさわしい、能動的な活動、遊びや仕事、学習などをどれだけ生き生きとするかで決まります。自由に自分を発揮できる子ども同士の世界が豊かに展開される異年齢の集団とそれを組織する、民主的な職員集団が必要です。職員は保育の場でその年齢や、発達段階にふさわしい、能動的な活動を引き出すことができるかどうかということが大きな課題となってきます。

（１）　子どもの心に寄り添える大人であること

子どもが外に向かって、能動的に意欲をもって活発に関わるためには、信頼し愛してくれる大人の支えが必要です。泣いたり甘えたりしながら、いつも自分の気持ちを受け止めてくれる大人の支えを梃に、依存しながら自立への道を歩んでいきます。子どもは間違いを食べて大きくなるといわれていますが、大人からみれば困ったことの連続です。しかし、安心して間違えることのできる人的環境と物的環境を作ってあげないと、子どもは萎縮し、のびのびと心置きなく遊ぶことはできません。安心できる大人がいることは人と関わる力をつける土台です。

（２）　発達の筋道と個性

どの子も一定の順序をたどりそれぞれの時期に同じような経験をして大きくなっていきます。しかし人間が発達するということは、一人一人がよりよい力をつけることであり、同じ人間になることではありません。さっさと力をつけてしまう子、ゆっくりじっくり時間が必要な子など、その子なりの活動が意欲的になるように支えてやることが大切です。子どもの年齢が低ければ低いほど時間をかけてゆっくりとして生活リズムの設定が必要です。子どもは生活や遊びを通して力をつけていきますから、必要な発達課題やその時期に

ふさわしい遊びをみつけて働きかけをしていくことが大切です。しかし大人がこの力をつかみどのような生活を組み立て、遊びの手立てをするかは、生活を共にしながら体ごとぶつかり合い、一緒になって遊んでこそその子どもを理解できます。

２　水、土、まわりの自然を生かし、太陽のもとで十分遊び心と体を鍛えます

この世に生を受けたすべての子どもは、健康で生き生き育つ権利をもっています。児童憲章では、「子どもは良い環境の中で育てられる」とし、子どもの権利宣言３０周年に当たる１９８９年１１月２０日国連総会で、子どもの権利条約が採択されました。そして日本でも１９９４年５月世界で１５８番目に批准される各地で子どもの権利について議論されています。未来を担う子どもたちの育ちを、大人たちの責任で作り出していかなければならないと規定しています。水の都大垣といっても大池町付近には、子供たちが入り込んで遊べるようなきれいな川はありません。また、川で魚やおたまじゃくしを捕ろうとしても、なぜかヘドロであり、子どもが足を踏み外して落ちようものなら、すごい悪臭です。しかし「自然は最高の教材」である。いわれるくらいに自然に変わるいい教材はありません。そこで職員はあちこちと探し求めて、少しでも子どもたちに、生き生きとした遊びを体験させたいと苦労をしています。そうした環境だからこそ、園内では、十分水を使って遊べるように井戸を掘りました。春にはまだ早い 3 月ともなると、水好きな子供たちは、小さな手を差し出してすいどうからちょろちょろ出る水を触ろうと一生懸命です。

水は皮膚に快い刺激を与え、皮膚感覚を高めます。また、砂や土にしみこませさらさらした素材を変化させ、固めたりどろどろにしたり、子どもたちは遊びへの意欲を高めます。きれいな服を着せられ、汚さないように、上手に遊ぶことを強いられ、ややもするとマスコットやペットのように育てられている子どもはいないでしょうか。

子どもたちは、砂や土で何かを作るために適した、きめ細かい、いい土を遊びこんでいるうちに発見していきます。そして、その土にどのくらいの水を混ぜると作りやすいのか、微妙な水加減を何回も繰り返す中で感じ取っていき、科学的な自然を見る目を養っていきます。こうした自然を素材に遊ぶことは、失敗を恐れることなく、また同じように繰り返し遊びます。手指を器用に動かし、水加減を工夫し、根気よく自分の納得のゆくまでやりとげます。そして、友達に見せたりしながら、友達と一緒になって「共感し合う」喜びを学んでいきます。ですから泥団子一個を完成させるまでの子どもの真剣さを考えるとき、たかが泥団子なんてとても思えません。心を込めて自分で作ったものを、他の友達が壊してしまったら悲しくなります。そして、一生懸命になればなるほど、心がこもっていますから、トラブルになってしまいます。ですから、子どもには、トラブルがつきものです。でも、こうしたやり取りがあるからこそ、相手の気持ちもやがては理解できるし、自分も経験を通して、自分を大事にする気持ちも育ってくるのです。

子どもはいつも真剣ですし、子どものやることには無駄が無いといわれています。無駄

なように見えてしまう大人の見方が足りないのかもしれません。集中力、手の操作力、想像力、創造力、遊びへの意欲、やり遂げるまでの持続力など、子供たちは遊びを通して、人間としての「生きる力」を学んでいきます。また、散歩に行き野原の草花にも目をむけ、そこに自然界の小さな生き物がいることを発見します。そのときの感動した言葉、その小さなものに触れる喜び、天道虫を捕まえようとする真剣な目つき、表情、指先にまで全神経を集中させ緊張しています。そしてそれを捕まえた時のやった一という充実感、なんと子どもらしい感情表現、喜びを全身で表すことの素直さは、体験してこそ培われるものです。

ほんの小さなことでもやり遂げるまでの、すべてのもてる力を集中させている、快い緊張感、やり遂げたときの全神経を解きほぐしたときの気持ちよさ、自然界と共に生きていることを体験を通して感じ取ります。この体験が基礎になり学習や労働への意欲として、やがて生きる力の基礎になっていきます。

３　父母と職員とで作りだす共同の子育てを目指します

働くことも子育てすることも、共に最も人間らしい営みです。しかし、保育園に入園させ働きながら子育てすることは、単に個人が抱える問題としてではなく、社会全体のあり方の問題として大きな矛盾が私たちの前に立ちはだかってきます。個人の努力だけではとても解決できない大変さです。この矛盾を社会的に解決しようとするのが保育園ですし、こうした中で生まれてきたのが、共同保育です。子どもが生まれても、働き続けたいと願う親が集まり、自分たちで建物や職員を探して、その運営にも責任をもち、単なる家族での子育てから、大勢の親や職員が一緒になって子育てをしていく新しい形態の子育てを作り出してきました。ですからその歴史をみても保育所は、働きながら、子育てをしていくことを応援するところです。また、今では狭い意味での保育に欠けるという理由のみでなくよりよい子どもの育ちを望む人たちも保育園を利用し、家庭と協力しながら、社会的に子育てをしていくところです。今では保育園そのものが一般化し、ほとんどの子どもたちの生活の場として利用するようになりました。

しかし子育てはいつの世も大人社会の反映であり、その影響を受けています。長引く不況で職を失い安心して働くことすらできなく生活の基盤も不安定になっています。こうした様々な条件が、子育てのストレスになり、親が子どもを虐待したり、殺してしまったり、そして、子どもが引き起こす、痛ましい事件も後を絶ちません。こうしたことが、「うちの子は大丈夫だろうか」と、ますます大人たちの子育てにたいする不安を大きくしていきます。これは、子どもも大人も苦しさをかかえて生きている証拠だと思います。そんな中で大人同士が連携し、様々な人と関わり支えあいながら、生きていくことは、楽しいものだということを子どもたちに伝えていけたらと思います。親から学び職員から学ぶ、人間関係の創造を目指し一緒になって、子育てをしていきます。